

# しが国際協力親善大使レポート

たかぎ けんた  
高木 健太さん

隊次：2017年度1隊

職種：理科教育

派遣国：ウガンダ

## プロフィール

滋賀県長浜市出身。学生時代に青年海外協力隊 0B の友人とタンザニアに旅行した際、その文化、人々の気質に心惹かれました。現地の学校で教育の現状を目の当たりにし教員として何らかの形で携わりたいと強く感じたことを今でも鮮明に覚えています。高校で6年間勤務し、協力隊に参加。現在、ウガンダに派遣されて6か月になります。

## 地域・文化について

私が活動しているブシェニ県は首都カンパラから南西にバスで6時間強の場所にあります。緑豊かな美しい丘陵地帯で、いたるところに調理用バナナのプランテーションが広がります。晴天時の真っ青な空と緑が茂る景色がお気に入りです。アフリカは暑いイメージですが、ウガンダは高地に位置するため、朝晩は少し肌寒く感じることもあります。昼間の日差しは強いですが湿度・気温がそれほど上がらず一年間通してとても過ごしやすい気候です。食事は、主食のポシヨ（トウモロコシの粉をこねたもの）、マトケ（甘くない調理用バナナ）などを鶏肉、牛肉、山羊肉、豆などのスープと一緒に食べるのが一般的です。朗らかで穏やかな気性の人が多く、町では見知らぬ人も気さくに声をかけてくれます。笑顔に溢れる、ゆったりとした生活スタイルに心癒されます。

## 活動について

私はルヨンザスクールという公立のキリスト教系中等学校で化学の授業を担当しています。中等学校とは日本の中学と高校を組み合わせたような学校で、前期課程4年と後期課程2年に分かれています。生徒数430名のこじんまりとしたアットホームな学校で、授業を担当していない生徒ともよく話をします。私の活動する地域ではニャンコレ語が第一言語ですが、授業はすべて英語で実施されます。

私の指導する化学では目に見えない抽象的な概念を図や言葉で巧みに伝えていくことが求められます。日本ではうまく伝わらないときは別の表現や生活の中の具体的な例を用いて理解しやすいようにかみ砕いて説明することができましたが、私の英語力では表現できる範囲が限られているのでうまく伝わらず歯がゆい思いをすることが多いです。そのため、土日や長期休みなどの空いた時間にも英語の学習は欠かせません。

ルヨンザスクールでは自分の教科書を持っている生徒はいません。このため、授業は教員が説明したことをノートに書きとることが中心です。聞き漏らさずに黙々と書きとっていくその集中力には目を見張ります。その一方で、考えたり、問題を解いたりする時間がほとんどないため、受け身の丸暗記学習が中心で、一度解いた問題でも数値や文章が少し変わったりすると答えられない生徒が多いです。そこで、私の担当する授業では、自分で考えて応用する力をつけてもらうために、思考を必要とする問題演習や発問を繰り返すようにしています。大半の生徒は今までの学習法に慣れているので、できない問題は考え方ではなく解答だけを手っ取り早く教えてもらおうとしますが、能動的に思考する習慣が身に着けられるよう粘り強く取り組んでいます。

化学の授業以外でも、育休中のラボアテンダントの代わりに、実験室管理、実験準備・片付け、生徒への実技指導を行っています。ウガンダでは中等学校の卒業試験があり、化学、物理、生物のペーパーテストに加えて、各科目の実技試験が必修です。試験が近くなると実験の授業が増え、実験室ではほぼ毎日何らかの実技の授業が行われていました。授業では高度な実験が実施される一方で、片づけの指示がないと洗わずに器具を返却したり、そのまま放置したり、ごみをごみ箱ではなく流しに捨ててしまうなど片づけの習慣が身についていません。また、モノを長く使えるように大切に扱うこともありません。実験後の雑多な実験室を見て、日本の生徒のモノを大切に作る心や、後片づけにも取り組む姿勢はすばらしいとつくづく感じます。環境教育の一環としても片付けはウガンダの生徒にぜひ身につけてほしい習慣です。実技指導に加えて、整理・整頓・片付けの指導を行い日本人のモノを大切に作る精神、もったいない精神も伝えています。

ウガンダに来て半年が立ちましたが悩むことばかりで、思い通りに活動がいくことはほとんどありません。赴任する前に自分が思い描いていた活動とは程遠いと感じることもあります。ですが、生徒・同僚になんらかの変化を感じることができたとき、自分の活動の意義を感じ、悩んでいることも忘れてしまいます。私の活動を認めてもらえればうれしいように生徒や同僚も、自分の活動を認めてもらえればうれしいはずです。お互いに認め合える信頼関係を築きたいと思っています。



学校の給食。手前がマトケ、奥がポシヨ



授業の様子



実験室での様子



実験室から見た学校の様子。手前のベンチがお気に入りの場所。

# しが国際協力親善大使レポート

たかぎ けんた  
高木 健太さん

隊次：2017年度1隊

職種：理科教育

派遣国：ウガンダ

## プロフィール

滋賀県長浜市出身。現在、ウガンダの中等学校で化学の授業を担当しています。着任してから1年6か月が過ぎました。

## 地域・文化について

私が活動しているブシェニ県は首都カンパラから南西にバスで6時間強の場所にあります。緑豊かな美しい丘陵地帯で、いたるところにバナナのプランテーションが広がります。晴天時の真っ青な空と緑が茂る景色がお気に入りです。アフリカは暑いイメージですが、ウガンダは高地に位置するため、朝晩は少し肌寒く感じることもあります。昼間の日差しは強いですが湿度・気温がそれほど上がらず一年間通してとても過ごしやすい気候です。朗らかで穏やかな気性の人が多く、町では見知らぬ人も気さくに声をかけてくれます。笑顔にあふれる、ゆったりとした生活スタイルに心癒されます。

## 活動について

私はルヨンザスクールという公立の中等学校で化学の授業と実験室の運営・管理を担当しています。生徒数430名のこぢんまりとしたアットホームな学校で、授業に入っていない生徒ともよく話をします。

ルヨンザスクールでは自分の教科書を持っている生徒はいません。授業は教員が説明したことをノートに書きとることが中心です。私の担当する授業では自分で考えて応用する力をつけてもらうために、思考を必要とする問題演習や発問・グループワークを繰り返していましたが、黒板や友人の解答をただ写したり、そもそもノートを取らなったり、授業が休み時間のように騒がしくなったり、授業に来なかったりと基本的な学習態度が身についていないと感じました。また、同僚教員の実験補助を通して、生徒に十分な実験指導がされていないため基本的な実験技術も身につけていないと感じました。そこで、私が担当する授業では実験を中心に据え、学力の向上・基本的な学習態度の改善を図ることを目標としました。授業中はルールを最低限かつシンプルにし、守れなかった場合は徹底して指導しました。その成果もあって、ほとんどの生徒が時間通りに実験室に來たり、授業中にノートをとることができるようになったり、話を聞くときは静かにできるようになったりして授業を受ける態度は着実に改善されています。また、実験器具を丁寧に扱ったり、実験後に片づけができるようになり以前よりもモノを大切にできるようになってきています。

授業中に生徒が楽しそうに実験に取り組む姿をみると自分が理科教員になった原点を思い出します。

ルヨンザスクールに限らずウガンダの学校では実験室・実験器具の数が限られているため、実験授業が行われることは滅多にありません。このため、抽象的な概念を理解できずに理科を苦手をする生徒が多く、卒業試験の理科科目では多くの生徒が30点以上の合格点を取ることができません。なんとかこの状況を改善したく、他の隊員が作成した卒業試験頻出かつ生徒が最も苦手としている実験トピックを写真入りの表にして教材化したもの（カラーチャート）を持って近隣の学校を巡回しました。今までウガンダになかったタイプの教材ということもあり大変好評でした。この活動をご縁に、現職理数科教員対象に視覚的教材を題材にワークショップを担当させていただき、県内140校にこの教材を普及させることができました。現在は、国の理数科教科プロジェクトがカラーチャートを含む視覚的教材の普及活動を引き継いでいます。学校周辺で始まった小さな活動がウガンダ国全体へ広がる活動となり、少しでも多くの子どもたちが理科を好きになれるためのステップが踏み出せました。

ウガンダに来て1年半が立ちました。最初は悩むことばかりで、思い通りに活動がいくことはほとんどありませんでしたが、仲間と協力して着実に活動の幅が広がってきました。1年前には活動がここまで広がると予想していませんでした。しっかりと目標を見据えれば小さな活動もやがて実を結ぶことを実感しています。帰国後は自分の経験をもとに国際理解教育にも携わりたいと思っています。



ルヨンザスクールでの実験授業の様子



教員研修で少ない器具・薬品でできる実験方法を紹介しました



実験室がない学校でもできる実験方法を普及させています



巡回先の生徒たちと一緒に取った写真です